

文庫 20  
102

發句

伊地知氏書冊



天明九年春種玉禰を以て  
 千句を以て傳へし物まのつ代  
 春らまじし朝日あゝるにす  
 石清あり祐として正月七日  
 名草花じわし宮ありし  
 本声冬けあり存花家  
 西うけさあしあをす  
 長享とひのま正根は所坊

去りし一書やめりきつる物すこ  
去日結くもきつる百款を類し  
と記す本河内いふれすみつる  
祇園し社中のみ句に寄所  
ら梅くこゆるあれ和山  
西塔理家は中乃日吉社  
ちりきつるもさう  
冬うらぬ宮とけり山海江  
大中臣時統家として

言らけく牛其家志きつる新瑞成  
藤原国昔教に東門射家とい  
跡きつるハあきつる一もこれ言  
物言ふもあつる  
梅の花こもつるけりきつるあきつる  
一もいしこつるけり梅のつるいし  
結人つる立枝やすし宿の梅  
上枚亭にけり梅と梅とけり  
聖廟は未ゆ



宿つや花結成るまゝ  
後亦貞秀猶生み  
まゝとてしるまゝ

公海得葉もろひて  
まゝりて

物花より又りそ  
後枝も世に池田  
うねりて  
小野結

軍中入道乃真大田  
朝の花といふ事  
かきみわたり  
春河前可考  
花より  
源感御波

又しつりやひや初花の歌  
息隠院乃むのりしはく  
西く又記と中しんけりる  
去の夜白中  
去所の先内りれ花の丸う  
鳥ハ先りぬ花あじ梅う那  
りし花とやのぬりり  
東塔玄舜は中坊と  
をとりし花あさつるも陰れ

又の十回ひれ去お十信院の歌  
僧教の基前はく百歌の歌  
あしつり  
おしつり  
三月の月  
川  
魚  
去所  
志

内岐よりそつやまら枝れ友のむ  
訓 英津師の方には如行  
さうあせはらり内岐の友の記  
三月つりよむえれ山うそ  
く内むくまうれしう見山うか  
武田大権を吏入道 宗勲家と  
月記のまきあり  
言てりいふはこつりむいし  
友橋九家よそつりまきあり

三月あといふ影はく  
あつにらあうよまられあれま  
卯月一日平取志もむ影はく  
せりてまてそつり花うらも  
日台れ結くまきりまきあり  
花のうら卯月は枝の三月れ  
高倉若つ常祐亭はく月記の  
連つりよ卯月代  
卯花乃書まれあつ影れぬ



細河濱川尚玄亭の月夜  
和心すゝの宮の草下や家なる枝  
麦の敷匂り  
うねうしほおもやもまら夕月梨  
知むいゝ山もささくぬ月夜ふ  
知むよい所なく宮成るらん  
玄陸津師も坊して  
あうそてあうそあうそあうそ  
新樹と

志ける系うらむくあきさう一本  
本れににける柳も末と  
郭  
ほとさす一もける物音の  
小聲の系ね本部家にく  
物花やうとくれあ  
何馬  
麦れ敷匂り  
しそせせしすいさく文の  
まねあく看しつらあ

又の十九日四月十六日心致信  
の十三日四十一佛の信名と冠にせ  
百部をこころにせ

交れは信名あらすなり月名  
五月のころ河島所

ありて年人ころる信名を部  
大館刑部政之亭にせく  
まき介りて友草

志けぬみらるる信名を部

新田礼部尚書亭にせく  
信名を部

水りて信名を部

橋原仲寺升信名を部

新の信名を部

麻葉門亭にせく

五月は信名を部

長村の信名を部

毎の信名を部

六月ぬとさうげんりふりぬれり  
六月ぬ、よの砂れぬりたまり味  
平春あ吉良常法外小野社  
久小野りし可

西わくを城くくしぬれぬり  
目古れ社くききくくく  
一和くともあつぬれ朝か

早苗と

風まきくわくくくく人れあか

夏月と

交れ朝と月けくぬれぬ

人よのりて管作

夏けれえく社ぬり

あ末資直組波田行

あ吉くくくくくく

大共清射小野れ家

みくくくくくくく

道高家備初の月のぬ

志りてしてひさひつらきう清あは  
千句逢秋く納涼と  
あ清と去秋をれやうり那  
武田光禄亭月夜  
新風やうれな屋うきま  
物ま乃あ句  
病少くあれ新れ朝あり  
はさく毎あ物多あう丸  
新くうひ松くうあわ  
あ

兵庫入道 宗弁に田うき  
わひあふら織蘇のけさ  
右る助入道 律棟水谷家え  
あき生はうじう記の小蘇  
秋輝うらう  
うの秋はれりれ音とこ  
音と  
あのかしやりまうりれ朝  
あ

物身よりしりしぬりしはらら  
夕身と結乃く山ふかや  
事海わられ山上方に  
家ほとほまされく山物り  
輝の教句  
まはらるる花やるも物り  
八月十日ろえ枝さけり  
ゆられみる月もわらるる  
十五夜

やうきりし月よからるる  
長亭子くく湯日有る  
動まきしる親もあ  
九十月のうらるる  
西方れり者のすまらるる  
菊さきる庭いこく  
志純法師  
ふかひりるる  
九月十之夜

あともうく極や二本村の月  
菊は日くつと結し月あるま  
新田礼平尚結家の千るり  
野月と  
穴よりや月よ興し整ふまのま  
白川別所と云ふりて  
若かりし月や夏の書林れん  
元用大権もまうりてぬく  
すめてまきあし結しに

春をまきしぬまのぬゆるまれ陰  
村のまぬ句  
山姥まふらぬまのぬゆるま  
村のまぬ句  
りそとつらつらまのぬゆるま  
結系すつらつらまのぬゆるま  
村の風らつらつらまのぬゆるま  
去日れつらつらまのぬゆるま  
村の色とつらつらまのぬゆるま

海らりた着にく 如きと  
みらるるわらさるる 此はゆき  
細川特列 幸水亭うら子句  
秋ハハハ本はゆらぬ時  
九月五日 世はるる此方  
り輝ふから くらく 定りし  
わのしは 法神 昔月 翔り法  
麻鶴め 井れ 秋ハ 糸く  
うんま 此 あり くら くら 時 ぬは

有同的 作と 身も くら 建 物と  
本 くら や 霧の 下の 下り みる  
冬 の 暮 句 の 内  
か くら くら 飛 や たら くら くら 以 沙  
物 くら くら くら くら くら くら くら くら  
和泉 くら くら くら くら くら くら くら くら  
玉 くら くら くら くら くら くら くら くら  
激 くら くら くら くら くら くら くら くら  
穴 くら くら くら くら くら くら くら くら

梅中尚えま

秋庭 家うん

寂く葉又うりらるる都が  
兵庫助え親伴4あくと

冬草の葉うりらるる都が

あ塔東春はれれ坊うん

うりらるるのうらねの宮

春誌は橋の東山如方はく

うりらるるにかつら事れり

宇治橋寺 秀貞上人の坊ん

物うりらるる秋日のうりらるる川

小聲は船の横瀬家とてうりらるる

まきのうりらるる月と

あくと梅うりらるる月夜は

冬に数うりらるる

山松うりらるる秋のうりらるる

うりらるるうりらるるうりらるる

あくとうりらるるうりらるる

菖松丸 井戸 あくと



みそをさしやうらうらふの音も松  
定路の里として  
権のこころをぬきうらひつか  
合つてといふうらひ  
うらひをうらひうらひい入る  
正孝法師のうらひをうらひ  
うらひをうらひうらひうらひ  
摩美法師のうらひ  
おまゝまゝ音ありまゝうらひ

信濃入道宗經横瀬家にて  
うらひをうらひうらひ  
時をふらうらひするうらひ  
救をうらひうらひうらひ  
音風うらひうらひうらひ  
山家うらひうらひうらひ  
うらひをうらひうらひうらひ  
おまゝまゝ音ありまゝうらひ  
うらひをうらひうらひうらひ

月ととてえしうたえのた書  
書の教なり

すすして月かかあるたの書  
慈法和尚の法華のたす  
少清そし水感は師さう物と産  
元々月書しはわけと部、部

書の教なり  
書とては山のくはるる形  
花とてあさい書りまはれ

前書房書政考湯川家

たれりつうつて書れ  
慈恵大師のまこと人のす  
知りしとて

山あみ書も八とあつた  
孫座とつた

行りつてはとるや書れは  
河内守長也松原す  
まのつたのみと



春

幼助

まさかぬ東のつゆのふしに  
 かへんのかさかたのふしに  
 いらしつじあはれ田のうらの  
 もくもくさのりささか  
 梅のりつ晴にまよはれ  
 し

消残るおのりの音さ  
 ぬる油のりささか  
 舟舟の入江の柳え  
 いらのりささか  
 あーやろろのりささか  
 今もろろのりささか



清道山にぬきうりてぬきぬき  
らうりのもちよわじゆん  
又かつし老るぬ昔のころに  
られながらふたのもち  
様々まの海のものにわたり  
ふれちつれともいふ人  
ふまの海のものにまのま

ふまの海のものにまのま  
昔のまの海のものにまのま  
も入る人子にわたり  
園のわが掛月影にまのま  
もらうと地をまのま  
まのまの海のものにまのま  
もらうと地をまのま

橋をたぐりてのきくす  
乃るまの物まぬ  
おらん井のまのこ  
らるるれは  
ふし屋のまの  
仲かたのこ  
行れぬるるるるる  
山吹

いすのまの  
者るまのまの  
麦

山城のまの  
卯乃るるるるる  
乃るるるるる

おきつりし河津もやうなるん  
分りしつねもふりくみの竹  
又とくろきかたわらせえ  
なまきすひりねらるあきさだ  
わらうりつはよめらさき  
友の教のりくるよりのゆりつて  
こもはあめのこもきと大内

いさかたれもやんは  
あつりつれきさるあ  
郭まやうとすつりつはから  
陰つりつねりつ下の草  
あつりつねもあつりつ  
くつれ命とゆりつた  
かき山舞のきりつた



葉のしるしに しのぶのさき

いばの早に しのぶのさき

らゝゝゝの しのぶのさき

柳らゝゝ秋の しのぶのさき

秋

らゝゝの しのぶのさき

花のらゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

のらゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

らゝゝの しのぶのさき

ぬきまよりの新みの草

うぐいせえうの

家つよ年の花は月として

しはうたを

きよとたのしむらん

とくさうらん

おとこしむし草の月

まゆのあともねを

月をさよる

あまのこ

しせ月がらつ下のうら

あまのこ

おのまよりのあまのこ

あまのこ

りけのたのふはまがあらあど衣  
こはくくしうほやうま  
ねそるふねの月のうらま  
うたあしけふ山のこころ  
此のまゝあそぶ月ぐらん  
らるくもるれりら  
とまられ月やけのなるまはて

こころあうねがねと物  
吟さう  
うとせかいちう明あま  
しうらまのほのれたの月  
あそぶらりるるるのまは  
ふのうらまふらまはま  
うらうらまはとほん胡兵

嘆けを寄れり此の菊のま  
りきよきしきき成る  
いこの秋のまこの日と  
高よりなせむもわらわ  
る月いひあらしうかゆ  
行へり秋とすききき  
あらしきあの家とあるを  
れし風

あかきりり秋のま草  
あれれの下露さしき  
いへりきききわらわ  
同しあきこの秋のま  
細き秋うらあきあ  
そとあらしきあき

冬

まじい雪おのる瑞る冬草  
仲冬月夜 雲と霞と  
梅 づらとけし 風のきしけき  
おぼろなる夜の雪なごもる  
あしなふの袖まじい雪  
あしなふの袖まじい雪

あつらふよりのちる雪  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき  
ゆきこころの昔の雪よき

枯るありしにちかむるさるる  
いけむいさありしむすりす  
うきむすりむすりよのうきむす  
らむすりむすりむすりむす  
らむすりむすりむすりむす  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
馬のきしハなむのきしむすり

むすりむすりむすりむすり  
ハナむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり  
むすりむすりむすりむすり

恋

カのうれし涙にふりまの  
おぼくはかき海一途の道  
其の力のこそ成昔より此日  
久しき人ゆえに何をもん  
偽り夢のさうらと成ぬん  
とつれぬつとあはくおを

まの日は人ときらつあ  
音清くはのがしゆみるん  
あはれにのらなまむ平  
白紙を巻くうらまは行しめ  
母のさすし朝とくまな嵐  
春と花よ涙のゆき宿かく  
いっさふえあかくららん

難波はむしりてかきかへる

まじりておのれをいふ

物旦にたのしむる感は

ゆりあふしう油はらう

梅はあはれしうあはれ

うらみあはれしうあはれ

父母にうらみあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ

いふあはれしうあはれ



是もせば偽らばしるるれ  
 必しんとすは用よしれ  
 土のふくは月をもちて其の  
 ちるれ此れはしるるれ  
 このむよしるるれ  
 心のちるれしるるれ  
 志まらるれ  
 志まらるれしるるれ

多しはしるるれ  
 別法のちるれ  
 永くまらるれ  
 晴くまらるれ  
 秋のちるれ  
 なる風まらるれ

すももいいしよのゆの...  
大の...  
命と...  
梅...  
...

よう...  
...  
...  
秋...  
...

日く〜はる〜人〜は〜り〜  
夕日かあすは晴るを  
ら〜り〜は〜は〜人〜ら〜ら〜  
立ちわらへつる次の世も  
この世もか〜は〜の〜  
い朝〜り〜人〜や〜か〜  
この世もあ〜の〜は〜

か〜い〜の〜は〜油もあ〜  
又月や〜い〜く〜  
まの〜は〜は〜  
た〜ら〜あ〜は〜の〜人〜い〜  
え〜の〜油も〜  
う〜の〜後の油もか〜



さのつちさうれ栲と地は  
市人のちりぬらうちのちりぬらう  
の物のあはらうらうらう南  
あま津の塩とくえりふら車  
日の入るころからまよまよ  
我はけとこちりてゆくのよすうん  
可とまよす。入あいののうね

夕暮の夕暮の海へ乃能のまよ  
ゆらもまよらうらうらう  
繪かあままよらうらう  
ちのちのちのちのちのちのち  
ゆはぬらうらうらうらうらう  
解あうらうらうらうらうらう  
まよあうらうらうらうらうらう

わづはなまはらとゆき松人  
むらあつはふくれむお屋の内  
照日乃くしと油すけ  
まきりみの者しとやとん  
すきみくはとあてはる  
をひまい人のきみのじうり  
ことあおのうらやゆえん

ちんちん  
後ろのおんすくすの者  
もこせとてか  
といふ人まはら  
人の身にあつ地のあつちあつな  
かあまはらつらとあつてん  
あつてはらつらとあつて

カカク人トスルハ此ノ如ク  
志シ居ルノ下ナリ  
秋ノモトナリ  
いふて其母一月ハ  
すすこむと云ふヤカク而  
王澤乃多ニ此ト云フ  
とらしめり人の心

カカク人トスルハ此ノ如ク  
志シ居ルノ下ナリ  
秋ノモトナリ  
いふて其母一月ハ  
すすこむと云ふヤカク而  
王澤乃多ニ此ト云フ  
とらしめり人の心

らしいしつらうすちもみ  
ぬのせとてふくたふすしつ  
ふーにききまふちのり  
あねまもせぬふらよきか  
うらうらふとまふれす  
ね出くうもけのたのめ  
しひりりうはのまのふり

あーしつらうすちもみ  
うらうらふとまふれす  
ね出くうもけのたのめ  
しひりりうはのまのふり  
あーしつらうすちもみ  
うらうらふとまふれす  
ね出くうもけのたのめ  
しひりりうはのまのふり





袖より流るるしほれがらし流  
舟よりわの船にのまられて  
しり舟とせられたる家々乃し流  
かき流やわつて風さしあつて  
すももせらるる舟とせられたる  
とる越る舟とせられたる舟とせ  
かき流やわつてしり流のそ

うら若のほの屋よひいさし  
まふいさし舟とせられたる  
まふ人のうら若のほの屋よひ  
たうらよまのいさし舟とせ  
橋をやわつて風さしあつて  
しり舟とせられたる舟とせ  
まふいさし舟とせられたる舟とせ



物事よきし果ての地なり  
山崎のすまはしきれと  
はるる代りしに  
中々しきも  
舟と結ぶの河に  
まろくし心も  
けり

ふあつ山崎のすまはしきれと  
武士の軍の場よ  
か  
舟と結ぶの河に  
けりしは  
舟人  
舟と結ぶの河に  
舟と結ぶの河に  
舟と結ぶの河に

日なせしむるにむらじらん 後のな  
たのしむるにむらじらん  
波とせしむるにむらじらん  
ふのちむるにむらじらん  
ふのちむるにむらじらん  
ふのちむるにむらじらん

しむるにむらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん  
むらじらん

さうな乃家うりえとある。  
海と入れぬの田舎を  
引てよめとらぬみは  
月よの山の海のいさく  
し入も神のす也  
るぬあぬぬとらぬみは  
いぬのうらむいぬとらぬ

か(事)なる月しむのあはれ  
しぬぬ入あいのぬ  
あもむぬとらぬみは  
かまつぬとらぬみは  
しぬぬ入あいのぬ  
あもむぬとらぬみは  
かまつぬとらぬみは  
しぬぬ入あいのぬ  
あもむぬとらぬみは

ては、あつひのいけふねは  
うらぬらやたのいのちと後さく  
まらういせいのいけふもらん  
しきくすこし開路とさるる  
しきくすこし開路とさるる  
る代のおのこもさるる  
あつひのいけふもらん

深河さるるいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん  
あつひのいけふもらん





行すれりるふと海の時  
河原乃まわらぬいふれと行成

夫とらる青い志ふと凡二十餘歳  
情とかなすこと又二百有里ノ音終の  
月の幸とらわられて民四の音の中  
築ちてきんいふりははら

かろくもて整とくく田いのみ  
いふりよとせれり柳下二柱を  
金の支目よとくもりやんはまの  
あゝ母くあゝとくもぬのいふらよ  
いふりよとせれり柳下二柱を  
性もあらぬとて候ゆは人のまるへ  
いふりよとせれり柳下二柱を

白梅の香に平一二月の香

宗祐

香句

香もくはちのりすまのじしを  
淡くくちかしくもて香同くれ  
梅の咲くれははの春の雷  
このころはたの香のた  
花の香もくちかしくもて香同くれ

花の香もくちかしくもて香同くれ  
梅の咲くれははの春の雷  
このころはたの香のた  
花の香もくちかしくもて香同くれ  
白梅の香に平一二月の香  
宗祐

せつりのちよしよのいし  
かきとるきりおぼのそは  
秋のきよあらしもさるは  
しのきよあらしもさるは  
仙人のいのちのほの  
宮のきよものきたふと  
らうらうれいおむら  
がくちのきうらうら  
な

いほきよれゆきのこ  
中より秋のこころ  
へうらうらうら  
後

四月日

宗御

付合

実数

今月よりしじりいひにまらぬや  
うらいたとあつあつあけがのむと  
もれんあつあつあけがのむと  
此月凡やしくしりいひにまらぬ  
とあつあつあつあつあつあつあつ  
とあつあつあつあつあつあつあつ  
はあつあつあつあつあつあつあつ  
二道乃縁戸はあつあつあつあつあつあつ

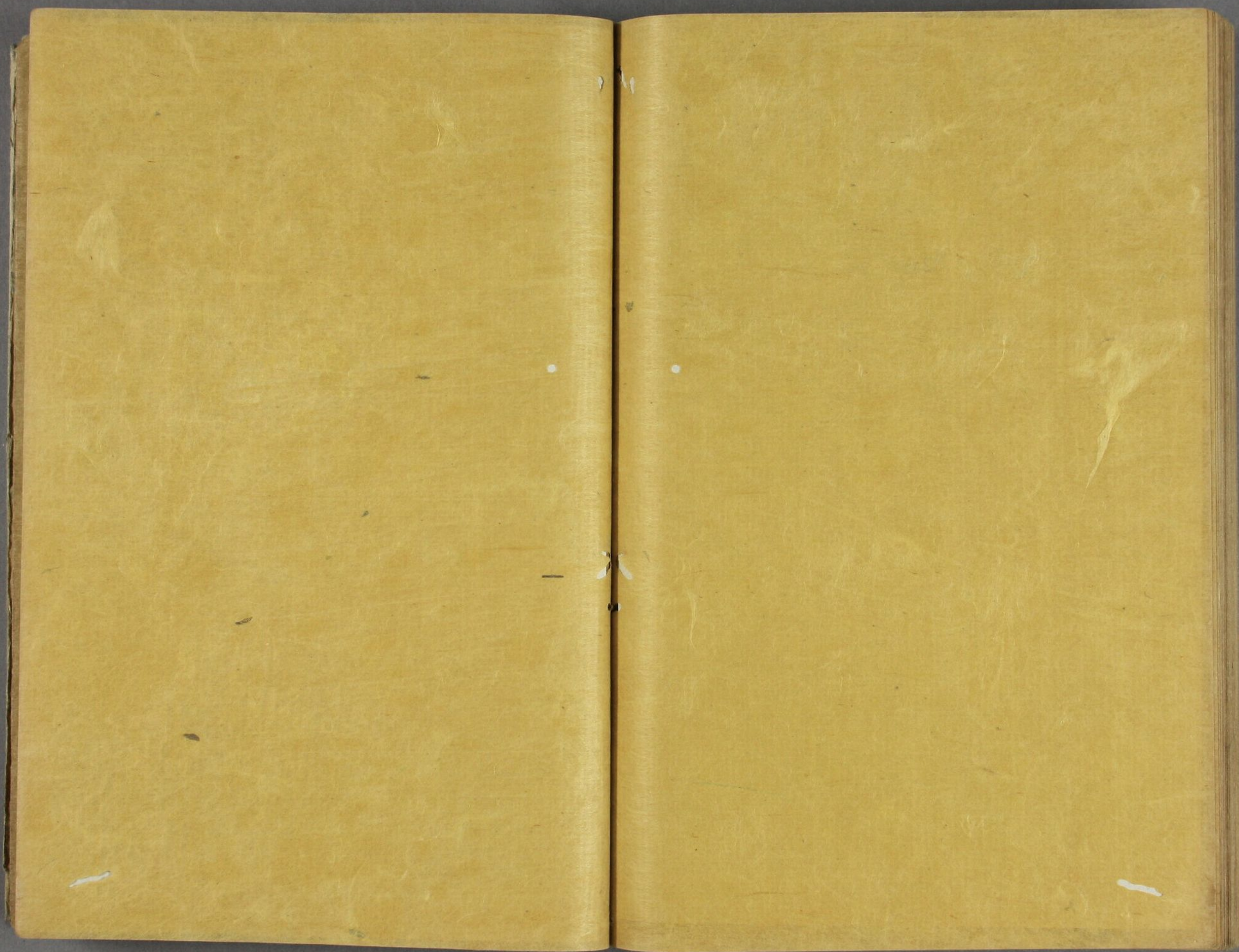




教夕

家長

<sup>小野口</sup> 向ヶけさうりりれ心の家  
<sup>連</sup> 子行乃代の孫布れけ  
<sup>し</sup> 孫の世田ふれけ  
<sup>平田</sup> あらさくわあいさぬ家  
 の事不明もさぬあき





以下  
8丁  
白紙

才者あるに心を信徳

道ひたすしや

善悪の

ふたりの海士

